

## 2015年7月5日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 13章 15～29節

説教：憎しみの果てに

### 1 アムノン：憎んだ

#### 1) ダビデをだましてタマルを手に入れる

ダビデの子であったアムノンは、その妹であるタマルに恋をしてしまいます。あるとき悪賢い友人がこんなアドバイスをします。

「あなたは病人のふりをしなさい。ダビデが見舞いに来たら、タマルをここによこして欲しいと、今にも死にそうな声でお願いしなさい。」アムノンは友人のアドバイスに従い行動を起こし、無理矢理にタマルをはずかしめてしまいます。目的は達成されました。

#### 2) タマルを捨てる

そこから次の問題が始まります。15節に、「ところがアムノンは、ひどい憎しみにかられて、彼女をぎらった。その憎しみは、彼がいただいた恋よりもひどかった」とあります。あれほどタマルを恋していたのに、どうして急にまるで手のひらを返したかのようにタマルを憎むのでしょうか。これは想像ですが、アムノンは、タマルの顔を見るたびに自分の犯した罪に心が刺され、不安と恐怖に押しつぶされそうになったのかもしれない。不安は怒りとなって相手を攻撃し始めます。怒りをタマルにぶつけ、それでタマルを追い出し、自分から遠ざけることで、なんとか心の平安を得ようとした。それが真相ではなかったかと思います。

### 2 アブシャロム：憎んだ

#### 1) ダビデをだましてアムノンに近づく

タマルははずかしめられたうえに、家を追

い出され、泣きながら兄であるアブシャロムの家に戻ります。そのアブシャロムはタマルから事の次第を打ち明けられ、「今は黙っていなさい」と言うのですが、それ以上のことはなにもしません。普通はどうしますか。すぐにアムノンのところに怒鳴り込むとか、裁判沙汰にするとか、とにかく大騒ぎをするはずで。ところがアブシャロムは何もしない。沈黙してしまいます。

#### 2) アムノンを殺す

悲しみの沈黙ではありません。22節で真相が明らかにされます。アブシャロムはアムノンを憎んでいた。だから沈黙していた。彼は、アムノンとは違い、欲望にまかせてすぐに行動を起こすような軽はずみなことはしません。その代わり、アブシャロムを殺す機会をじっと待つのです。二年待ったときそのチャンスが巡ってきました。

アブシャロムは、羊の毛の刈り取りの祝いを口実に、ダビデ王の息子たちを全員招く計画を立て、王であるダビデの許可を求めるとにしました。ダビデはこう答えます。25節。「いや、わが子よ。われわれ全部が行くのは良くない。あなたの重荷になってはいけないから。」ことばは非常に丁寧ですが、このことばの奥にあるものを考える必要があります。ダビデには二つのことを心配しています。一つは、ダビデの息子たちが全員一つところに集まることの危険です。例えば、アメリカの大統領と副大統領は同じ飛行機には絶対に乗らない。プロ野球チームが飛行機で移動するときも全員同じ飛行機には乗ら

ない。これをリスク分散と言うのだそうです。同じようにダビデも息子たちを普段は別々のところに分かれて住まわせます。一つところに集まってしまうと、何か起きたら、あと取りがいなくなる可能性がある。アブシャロムの提案を聞いたとき、ダビデはそのことをまず心配します。

二つ目の心配。かつてダビデは、アムノンとタマルの事に関する一部始終を聞いて激しく怒りました。タマルはアブシャロムの家で暮らしています。そうしたら、当然アブシャロムがアムノンに対して良い感情を持っていないということは想像がつきます。アブシャロムとアムノンが接触したら何か事件が起きるかもしれない。ダビデはそのことを心配します。なので、アブシャロムの提案にやんわりと反対の意見を言う訳です。しかしアブシャロムはあきらめない。とうとうダビデは根負けをして許可を与えてしまいます。

その結果何が起きたか。ダビデの心配は的中しました。アブシャロムは周到な準備をした上で、アムノンを殺してしまいます。

### 3 ダビデ

#### 1) 愚かな王ダビデ

ここまでアブシャロムが何をしたのかを詳しく見てきました。皆さんは疑問に思ったかもしれません。ダビデはいったいなにをしていたのだろう。アムノンがタマルにひどいことをしたということを聞いたとき、彼は激しく怒りました。神の前に正義がねじ曲げられたのですから当然です。だったら、ダビデは神の正義を取り戻すために、王として、ダビデ家の長として、きちんとした対応を取るべきではなかったのか。ところがなにもしな

い。アムノンにだまされ、アムノンがひどいことをしたと聞いても何もしない。アブシャロムにもそうです。いろいろな危険があることを知っていながら、しぶしぶではあつたけれど許可を出してしまう。ダビデは愚かなのですか。そんなはずはない。彼は若いときからイスラエル軍隊の司令長官として作戦を練り、兵を動かし、敵と戦ってきた人です。自分の上司であったサウルから、今で言うパワーハラメント受けようとも、殺されそうになっても、妻を奪われ、地位も財産も奪われてもなお信仰を失わず、神の前に忠実に歩んできた人です。多くの経験を積み、すぐれた智恵をもっていた人です。それなのに、なぜか息子たちのことになるとダビデは急に愚かな父親になってしまうのです。

#### 2) 家族にも及ぶダビデの罪

愚かになる理由があります。ダビデはどんな罪を犯してきたのか。そのことと関係があります。ある夏の昼下がりに、ダビデが屋上で散歩していたとき、向こうの家の屋上で若い女が裸になって水浴びをしていた。それを見てしまったのをきっかけに、ダビデは姦淫の罪を犯します。自分の罪を覆い隠すためにバテ・シェバの夫であったウリヤを殺してしまいます。後に、預言者ナタンを通してダビデは自分の罪を告白するのですが、そのときナタンはこのような警告を与えていました。

「あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」(12章14節)

ナタンの語ったことば不思議です。「主の敵」とはいったい誰のことか。「侮る」とは言い換えれば、「いい気味だ」と言って相手することをさげすんで喜ぶことでしょう。ダビ

デが罪を犯したことで、誰か喜んだというのでしょうか。「主の敵」と聞くと、悪魔とかサタンというものを想像します。でも今日の箇所を見てください。ここには明らかに主の敵がいるのです。いったいどこにいるのか。ダビデの心の中です。ダビデがどうして何もしなかったのか。いや、正確に言えばなにもしなかったのはなぜか。すべて「主の敵」と関係しています。

ダビデはアムノンがしでかした事件のことを聞いたとき、激しく怒りました。けれども次の瞬間、胸に突き刺さるものを感じました。自分がかつてバテ・シェバと何をしたのか。自分もアムノンと同じようなことをしてきたのではないか。そんな自分は人を責める資格があるのか。自分のことを棚に上げて、アムノンに神の正義を説くことはできません。そう考えると、もう何もできなくなってしまいました。それが主の敵と言われるものの実体です。

アブシャロムのこともそうです。計画を聞いたとき、これは危ないとわかっているけど、ダビデの中にかつての罪のことが思い起こされるので、強く言えない。アブシャロムの言いなりになってしまう。その結果、大きな悲劇が起きてしまいます。

### 3) ダビデの末として来られるイエス

あの信仰者ダビデでさえ、家族の中に起きていく問題を正しく扱うことはできませんでした。おそらくみなさんも同じ経験をお持ちだと思います。親であるなら自分の子どもは正しく育てたいと誰もが願います。けれどもいつも正しく指導できるかと言えば、そうはいかない。自分の中に解決されないままの罪があると、その子どももいつの間にか親の

弱さを受け継いでしまうのです。親の罪が子どもにも受け継がれ行く。私の経験ですが、小さいときはこんな父親にはなりたくないと思っていたのに、大人になって自分が子どもを育ててみると、父親と同じことをしている自分がいることに気がつき、愕然としたことがあります。主の敵は、私たちの心の中にもあるのです。いったいどうしたらよいのかと思います。

発端は、ダビデがバテ・シェバとのことを犯したことから始まります。最初はダビデ個人の問題でした。しかし、ダビデの罪はやがてダビデ家全体に深刻な問題を引き起こすこととなります。

神はこれをご覧になっても何もできないのでしょうか。主の敵はいつまでもあざ笑っているのでしょうか。私たちの主はどこから来られるのですか。罪のないきよい家系から来られたのですか。主はダビデの末として来られました。ダビデ一族はきよかったのですか。いいえ、今日見たとおりです。不倫をするダビデ、近親相姦をするアムノン、憎しみから人を殺すアブシャロム。どれもひどい話です。そういう家系から、主は来られた。それは何を意味しますか。憎しみが憎しみを呼び、やがて人を殺すことも辞さない。その罪の中に主が立つてくださった、ということではないのですか。主は、ダビデの家族を救うために来られたのです。どうしようもないほどもつれてしまった私たちの家族を救うために主は来られました。

主の敵は、ひととき私たちの中で勝ち誇るように見えるかもしれませんが、しかし、主の敵は主が十字架でいのちをお捨てになったとき、滅ぼされました。私たちはダビデのように、弱くなってしまふことがあります。

主はそんな私たちの弱さを栄光に変えてく  
ださったことを覚え、主の御名をあがめたい  
と思います。